心音 こころね

季刊誌「こころね」 第16号 KOKORONE

大分循環器病院広報誌
［こころね］

2019. January Vol.16

新任のご挨拶

大分循環器病院
麻酔科部長

永瀬（ながせ） 喜久（よしひさ）

2017年6月ころ秋満忠郁院長のお誘いもあり真新しい病院の見学に訪れ10月より大分循環器病院麻酔科部長として赴任しました。2年目になり少しずつここでの生活にも慣れてきました。先日8年前に亡くなった父が夢の中で「元気にしているか？」と笑顔で問いかけてきましたが、「おかげさまで元気に医者をしています。」と答えたところで目が覚めました。そういえば物心ついたころより父は私の将来を気にかけてくれ、医者の道に進むよう進言してくれました。1968年に佐賀市大和町に生まれ、小さい頃は少年野球をしながら絵画教室に通っておりましたが、両親の強い希望もあり中高一貫校の寮に入り、一年間浪人生活をして長崎大学医学部へ進学、その後佐世保市立総合病院で麻酔科初期研修を受けました。本心では美術大学に進みたかった私は学業もほどほどに長崎や佐世保の自然に魅了され写真を撮ったり、柔道をしたり、丸山で遊びまわってばかり、理想の医師像が思い描けずぶらぶらとすごしていたものです。キリスト関連施設群の世界遺産登録になった長崎と言えば原爆でも有名ですが、大学時代は爆心地公園の近くで暮らしたこともあり、ゴルバチョフ大統領初来日の際に、数十人のボディーガードが見守る中人込みをかき分けて移動中の大統領を見ることができたことは長崎でのいい思い出になっています。研修期間の後は長崎大学大学院薬理学教室に所属し、毎日動物実験をして論文をまとめました。その当時私を指導してくださった貝原先生は、「養生訓」を書いた貝原益軒のご子孫にあたる方で、長崎大学第三内科（循環器内科）の講師をされていた方でした。また私自身が毎週大学病院で心臓血管外科手術の麻酔を担当させていただいたご縁もあり、心臓・循環器疾患に関わる機会が多く、身近な興味のある分野になりました。

2001年より医局の派遣で大分県立病院麻酔科へ勤務することになり、現在麻酔科副部長の油布克己先生と木田景子先生と共に、胸部外科手術や心臓血管外科手術の麻酔と集中治療に従事しました。3年間の嘱託勤務の後、医局を退職し佐伯市長門記念病院へ就職しました。塵肺患者様の病状把握や全身麻酔管理を経験する中で呼吸器内科の後藤陽一郎院長や三戸克彦先生の重症呼吸器疾患の治療を垣間見ることができたことは貴重な体験でした。また当時在籍されていた元大分日赤病院整形外科副部長の永津治先生や現大分整形外科病院松本佳之先生の整形外科外来に参加させていただき星状神経節ブロック・神経根ブロック、仙骨裂孔ブロックなど習練させていただきました。永津先生には、オートバイやウインタースポーツを教えていただきました。趣味の世界でも厳しい指導は先生のお人柄によるもので、様々な物事に取り組む姿勢には多くの学ぶべきものがありました。また脊椎手術を中心とした年間約600例の麻酔経験はその後の仕事においてもたいへん貴重な体験になりました。

その後、病院体制の変更に伴い2008年から大分県日田市にある済生会日田病院の麻酔科に勤務しました。毎週佐賀大学や久留米大学から応援に来られる麻酔科の先生方と交流を行い最新の麻酔技術を習得していきました。エコーガイド下神経ブロック治療を併用した全身麻酔もこの時期に導入しています。またそこでは林田良三院長、西村寛元副院長の勧めもあり、緩和ケアチームの立ち上げに参加させていただくとともに、日田・玖珠地区の救急医療や地域医療にかかわることができたことはたいへん貴重な経験となりました。

現在大分循環器病院では心臓手術と整形外科手術の麻酔、水曜日にペインクリニック外来をしています。心臓血管外科手術の麻酔には多くの生体モニター類が必要です。その中でもスワンガンツカテーテルと経食道エコーは欠かせない機材です。これらの機材を使用し心臓血管外科岡元先生のご指導の元、経験豊富な看護師や臨床工学技士と連携してカンファランス・手術準備を行い心臓手術に臨んでいます。また整形外科の内田先生のご指導の元、難易度の高い「手の外科手術」の伝達麻酔をエコーガイド下に行い、からだに負担をかけない安全な局所麻酔を心掛けています。

全身麻酔

吸入麻酔薬を中心とした鎮静・鎮痛・無動化を目的とした麻酔
痛みや意識を一時的に安全に取り除く目的
前日入院で検査、準備後当日手術室にて行います。

区域麻酔

脊椎麻酔（下半身麻酔）など
意識のある麻酔です。
手術中術者の説明を聞きながら手術を受けることが可能です。

伝達麻酔

右手だけ、あるいは左手だけエコーガイド下神経ブロックを行います。
意識のある麻酔です。
手術中術者の説明を聞きながら手術を受けることが可能です。
当日に来院してその日の帰宅が可能です。

ペインクリニック外来

エコーガイド下星状神経節ブロックやエコーガイド下腰方形筋ブロックをしています。

頸部硬膜外ブロックや腰部硬膜外ブロックは血栓予防薬や脳梗塞予防薬を内服されていると行うことができませんが、エコーを使い安全に正確に行うことで合併症のリスクを限りなくゼロにしていますので、ブロックができないからとあきらめずに当院ペインクリニック外来を受診していただければ上記のブロックなど考慮した総合的な痛みの治療を考えていくことが可能です。安全な麻酔とブロック治療を目指してスタッフ一同努力をしていきたいと思います。

部署紹介

3病棟

師長　吉野（よしの） 久美子（くみこ）

3病棟は循環器内科・心臓血管外科の病棟です。主に心臓カテーテル検査・治療を受けられる方、心不全で治療が必要な方、動脈硬化などで血管の治療が必要な方、心臓の手術を受けられる方などが入院されています。命の源である「心臓」のご病気で入院され、不安を抱えておられる患者さんへ私たち看護師25名と看護助手5名で、日々笑顔を絶やさず真摯に向き合っています。

最近は社会情勢を反映するように高齢者の方が多く入院されてきます。退院後、患者さんがお困りにならないよう、入院中からソーシャルワーカーと連携をとり、心不全手帳を活用しながら自己管理ができるようにお手伝いをさせて頂いています。また、心臓カテーテル検査の様子を動画で見ながらオリエンテーションをすることで、安心して検査・治療を受けていただけるようにしています。

毎日、緊迫した状況の中でも、季節折々の雰囲気も絶やさないように、クリスマスの飾りつけをしたり、心臓リハビリテーションの一環で理学療法士さんが中心となってベランダで夏野菜を栽培したりと患者さんと一緒に楽しみながら工夫をしています。

4病棟

師長　姫野（ひめの） 輝和子（きわこ）

4病棟は整形外科・消化器内科・循環器内科・腎臓内科等の、地域包括ケア病床20床を含む49床の混合病棟で構成されています。スタッフは看護師28名と看護助手4名が働いています。

整形手術療法、内視鏡検査・治療、消化器血管造影、地域包括ケア病床ではリハビリ（整形・心臓）を主とし、10代～90代まで幅広い年齢層の方が入院されています。その為、急性期から慢性期、終末期と様々な対応が求められる部署となっています。

患者さんはもとより、ご家族の心身の苦痛・不安に寄り添いながら、安心・安全な看護の提供を行っています。

特に地域包括ケア病床においては多職種との連携を行いながら、切れ目の無い看護を目指し、退院支援に取り組んでいます。

このような中、私たち看護師はお互いの知識の共有、自立を目指し、活き活きと看護に取り組めるよう日々邁進しています。

「地域医療魅力発見インターンシップ」を開催しました

10月11日、18日の2日間。大分市内の高校生が医療現場を実体験するため当院にやってきました。

まず白衣に着替え、外来診察室や検査室、透析室などいろいろな部署を見て回りました。各部署で専門のスタッフによる説明を聞き、心電図やエコー検査を体験しました。

また、実際に手術着を着てカテーテル室での実際の手技を見学したり、医師の説明を聞いたりしながら本物のカテーテルにも触れました。

後日、生徒さん達から届いた報告書に“医師になりたい気持ちがますます強くなった”などのたくさんの感想がしたためられており、とても嬉しく読ませて頂きました。また、このような機会があれば積極的に協力していきたいと思っております。

研究発表会を開催しました

第7回大分循環器病院研究発表会が平成30年７月２８日に開催されました。
医局1題、看護部3題、コメディカル2題、事務部1題の計7題の発表がありました。
日頃の研究の成果を発表し、会場からは質問や意見が多くあり、大変有意義な研究会となりました。
今回は他の医療機関の方も見学に来られ、盛会のうちに終了しました。
今後も日々研鑽に努めより良い医療を提供できるよう精進してまいります。
実行委員の方々、おつかれさまでした。

心臓リハビリテーション(心リハ)とは

理学療法部　石甲斐 耕介（いしがい こうすけ）

心不全や心筋梗塞・狭心症、心臓の手術など、心臓や血管の病気による入院では、治療のために一定の安静期間が必要となり、長くなるほど筋力や持久力といった体力は低下します。また退院してすぐには強い活動はできませんし、どの程度活動しても大丈夫なのかが分からないため不安もあります。家庭復帰や職場復帰の前に、低下した体力を安全な方法で回復し、精神面でも自信をつける必要があります。

このように、心臓・血管に病気をお持ちの患者さんが、体力を回復し、精神的な自信を取り戻して家庭や職場に復帰し、さらに病気の再発を予防し快適で質の高い生活を維持することを目指して、運動療法、病気の管理を学ぶこと、生活指導、カウンセリングなどの活動プログラムに参加することを【心臓リハビリテーション(心リハ)】と言います。

つまり、心リハの目的とは

❶心臓・血管の治療のあとに家庭や職場に復帰できるように体力をつけること（心臓・血管に負担をかけないように身体を整える）

❷心臓・血管の病気の再発を予防するために、病気について学び、自己管理方法（セルフチェック・食事療法・薬の管理・運動療法）を身につけること、となります。

疾患の治療だけではなく、治療後にその疾患の再発防止のため、生活習慣全般を含めた改善を図ることが大きな特徴となります。

当院には、多職種から構成される心臓リハビリテーションチームがあり、医師・看護師・理学療法士・薬剤師・栄養士・ソーシャルワーカー・臨床検査技師などのスタッフが、上記目標達成の為に支援させて頂いております。チームとしてひとりの患者さんについて情報共有を行い、連携を取りながら関わらせて頂いています。

平成30年7月、理学療法士3名が日本心臓リハビリテーション学会主催の「心臓リハビリテーション指導士認定試験」を受験し、合格することが出来ました。これによって、以前より資格保持している2名と合わせ、理学療法部には5名の心リハ指導士が在籍することとなります。

今後も心臓・血管に疾患をお持ちの患者さんによりご満足して頂けるリハビリを提唱できるように、心リハチーム一同研鑽を積んでいきたいと考えておりますので、よろしくお願い申し上げます。

栄養のおはなし

管理栄養士　森迫（もりさこ） 浩美（ひろみ）

ぶり

ぶりは冬の味覚を代表する魚で、12月（師走）に入って美味しくなるとして、漢字では「鰤」と書きます。成長によって呼び名が変わることから「出世魚」と呼ばれ、縁起の良い魚として古くから祝事などにも用いられてきました。

栄養も豊富で、良質なたんぱく質と脂質をはじめ、ビタミン、ミネラルなど多くの栄養素を含んでいます。

脂質には、必須脂肪酸である EPA（エイコサペンタエン酸）や DHA（ドコサヘキサエン酸）が多く含まれます。これらは、血液凝固を防ぎ、血栓ができにくくなるという効果があるとされ、心筋梗塞や脳梗塞の予防が期待できます。

また、ぶりはあらまで美味しく食べられるのも特徴です。刺身、塩焼き、照り焼き、煮つけ、西京漬けなど幅広く、一尾を余すところなく調理できます。

脂の多い部位は、脂を落として調理する塩焼き、照り焼き、煮つけなどに。脂身の少ない赤身の部分は、揚げ物やソテーなど油を足す料理に向いています。

ぶりの最も美味しい時期は冬。真冬のぶりを様々な料理でお楽しみ下さい。

患者サービス委員会より

お月見コンサート

大分芸術文化短期大学OGの「さくら組」のみなさんによるコンサート。

本格的な演奏と歌声はとても素敵でした…♪♪

キャンドルサービス

聖歌隊と一緒にサンタさんも、お菓子のプレゼントを持って、お部屋を回りました…

編集後記

新しい1年が始まりました。今回は新年号とあって、ボリュームが普段の1.5倍増しとなりました。最初から最後までお読み頂いた方はお疲れではないでしょうか…。次回からはまた普段のボリュームで、我々『こころね』編集スタッフ一同頑張って参ります。

例年と比べて暖冬ではございますが、インフルエンザが流行しています。みなさまご自愛くださいませ。

医療法人　輝心会
大分循環器病院
Oita Cardiovascular Hospital
〒870-0837 大分市太平町4組
TEL 097-544-8800（代表）
ホームページ：http://www.oita-junkanki.jp/

読者の皆様のご意見・ご要望をもとに、より充実した「こころね」を目指します。
ご意見・ご要望は、FAX：097-544-5553又はE-mail:jimu@oita-junkanki.jpまでお寄せ下さい。